

# 景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2024-01-01



## 「移動」が景色を変える 館山市、西岬モビリティプロジェクト「さきもび」

房総半島南部には、東京からの日帰り観光で訪れたり、セカンドハウスに滞在する人が多い。西岬（にしざき）というエリアもその地域である。その半島端のモビリティにかかるプロジェクトを「さきもび」と呼んでいる。2021 年度観光庁の事業で、どうしたら地域の高付加価値化ができるかが求められたのに応えて、私たちはモビリティに着目し、海岸線に沿って 2km 弱のエリアで電動の低速 4 人乗りカート（グリーンスローモビリティ略してグリスロ）を約 1 ヶ月間走らせた。来訪者と生活者が乗り合える乗り物を目指した。といっても、来訪者と生活者ではニーズが違う。地元の方の犬の散歩に同行したり、観光客に声をかけて一緒にしたりしてルートを検討した。

人の暮らしに分け入るような小道をゆっくり走行しているから、偶然出会った人とちょっと立ち話ができる。「道草できる乗り物です」と地域のみなさんにご案内したら、沿道にお住まいの方から「青いやかんの看板を出しておきますので、青いやかんの看板を見かけたらひと休みしてってください」とご提案いただいた。「青いやかん」賛同者がぼつぼつ出てきた。コロナ禍の真っ只中、余所者が地域のお宅の庭先で暖かいお茶をいただきながら他愛のない話ができる ... 道草できるモビリティが、来訪者にとって地域の魅力となっている風景だ。

決まった時間に必ずくるわけではないけれど、たまたま出会う席が空いていたらいつでも乗せてくれて、ちょっと寄り道して家の近くまで届けてくれる。「グリスロを探してたら、7000 歩も歩いちゃったよ」と、少し足の不自由な女性が明るく笑いながらやってきたりもした。

地域のみなさんは役に立ちそうにない乗り物に当初戸惑った様子だったが、実際に走ると、景色が変わったと感じ、そのことを多くの人が好意的に受け止めてくれた。孫といっしょに乗ったら楽しそうとの意見も合ったが、J. アーリーの言う「移動することで、世界は見られ、感じられ、経験され、知られるようになり、「情動」の対象にされるようになっている」とはこういうことかと実感させられた。

私たちはより速くより効率的な移動を追求してきたけれど、移動が地域の価値を高めるとするならば、それは「いい寄り道」にあるのではないだろうか。

ここ半島端で引き続き、2023 年度は経産省スマートモビリティ事業のお手伝いをしている。

<https://sakimobi.studio.site/>

東京大学大学院教授/TDA正会員 岡部 明子

## 目次

### P1

#### ■巻頭

「移動」が景色を変える

／岡部 明子

### P2～3

#### ■TDA NEWS 1

『観光と景観』

「建築の街TOKYO」を目指した

ツーリズム

考える場としての建築ツアー

／和田 菜穂子

### P4～6

#### ■TDA NEWS 2

対談『韓国研修で学ぶべき景観』

作山 康 鈴木 俊治

金子 祐介 オム・ジョン

### P4～5

#### ■TDAトピックス

神楽坂Jane's Walks2023に参加して

おもう

／井上 洋司

### P7～8

#### ■景観故記

No.7 都市景観と人の心身を左右

する街路樹

／藤井 英二郎

### P8

#### ■身近な景観を作る

第9回 京都の暖簾：景観づくりを

支える住民意識

／武山 良三

#### ■ホワイトボード

## 観光と景観

コロナが収束し、日本にインバウンドの波が戻りつつある。そのためのコンテンツとして景観も寄与するのか？ 本号は、そうした景観を活用した観光産業について考えたい。

### 「建築の街TOKYO」を目指したツーリズム

東京家政大学准教授／東京建築アクセスポイント代表理事 和田 菜穂子

国内外の旅先で行く場所、城郭などの歴史的建造物やその都市にある美術館などさまざまであろう。自然の風景を楽しむことを目的にする旅行もあるが、都市においてはその街のシンボルとなっている建築を訪ねることが多いのではないだろうか。建築は身近な文化資源であるにもかかわらず、「何をどう楽しめばよいのか分からない」という人が多いのが実情である。

2016年に設立した（一社）東京建築アクセスポイント（AP）は、建築を文化資源とみなし、建築の歴史的価値やその魅力を「建築ツアー」によって広く一般に伝える活動を行っている。美術館では絵画鑑賞のポイントを伝えるため、学芸員によるギャラリートークが行われている。同じように都市にある建築もパッと見だけではその特徴や魅力がよく分からない。なぜなら我が国では市民に向けた建築教育にほとんど目が向けられておらず、一部の大学やカルチャースクールでのみ社会人向け講座が開講されているにすぎない。そこで我々は一般市民を対象に「建築ツアー」という形で「実際に見て学ぶこと」に重点をおいた実践的な建築教育を行うことにしたのである。平均すると毎月2～3回のペースでツアーを企画し、設立7年余りで300回近いツアー実績を誇る。理想をいえばアメリカにある「シカゴ建築センターChicago Architecture Center（旧シカゴ建築財団



CACのウォーキングツアー

Chicago Architecture Foundation）」を目指し、毎日何らかの形で建築ツアーが開催されている状況にしたいと考えている。

そこで筆者は2023年8月、建築家の松岡恭子氏と一緒にインタビューと視察調査を目的に渡米し、シカゴ建築センター（CAC）を訪れた。松岡氏は九州で「福岡アーキテクチャーファンデーション（FAF）」というNPO団体を主宰しており、我々と同様建築ツアーを主体とした活動をおこなっている。我々はシカゴで実際にいくつかのツアーを視察、体験することとし、まずはCACのメインの活動である「リパークルーズ」に参加した。街の中心を流れるシカゴ川を下るボートツアーである。現在のシカゴの街は1871年のシカゴ大火以降に形成されたが、そのシカゴ大火はアメリカ史上最大級の災害といわれ、800ヘクタールもの街が壊滅状態となった。それ以降、シカゴは木造住宅を禁止し、レンガ造、石造、鉄骨造を推奨し、のちに「摩天楼」と呼ばれる高層建築の建設に着手する。そのような歴史的背景や都市形成の過程をガイドによる解説で学ぶのである。解説を聞きながら、我が国の1923年の関東大震災、1945年の東京大空襲による被害、そしてその後の東京の復興が頭をよぎったが、本紙面では割愛する。次にいくつかのウォーキングツアーに参加した。どのガイドもボランティアスタッフで、彼らのほとんどは



APのワールズツアー「船から視察する水都東京の姿」

現役の仕事を引き退した、社会的意識の高いシニアだった。その後、我々はCACの教育部門の担当者と企画部門の部長にヒアリングを行ない、主にボランティアガイド育成やこども向け建築教育の現状について伺った。今後、我々が活動を継続させていくには、やはり案内役となるスタッフの育成が重要だからである。

今までの活動を振り返ると我々は一般に向けた「建築教育」に主眼をおいていた。2023年にはその教育的活動が評価され、日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞した。今後も引き続き、教育活動を展開していく予定だが、次の課題は「建築ツーリズム」だと筆者は考える。昨今、海外からの観光客が急増し、さまざまなツーリズムが展開されている。その中でも建築が我が国の文化や歴史を伝える一つの観光資源である、と考えるからこそ建築の歴史や価値をきちんと伝えることのできる人材の育成が重要な鍵を握るであろう。訪日外国人に向けた「建築ツアー」の企画内容や運営方法を検討することが必要である。

「建築の街Chicago」という位置づけが定着したのも、それを後押しする教育的組織や施策があったからこそである。「建築の街TOKYO」を世界に推し出すためにも、我々（一社）東京建築アクセスポイントは次なる展開に身を置かねばならないだろう。



APの親子向けツアー「上野にある美術館のひみつを探ろう」



## 考える場としての建築ツアー

Scaledenmarkフリーランスガイディング  
アーキテクト／SQ1-SquareOne アー  
バンデザイナー兼ビジネスディベロッ  
パー 池田 麻美

スケールデンマーク（Scaledenmark）は、デンマークの首都コペンハーゲンを拠点に建築ガイドを開催する企業である。ガイディングアーキテクト（Guiding Architects）という、世界最大の建築家による建築ツアーのネットワークに属しており、異なる国の担当者と情報交換を行ったりしながら、協力して活動している（東京からの適した参加者も募集している）。スケールデンマーク単体では、ヨーロッパを中心に、毎年約15ヶ国の企業、教育機関、地方自治体などから顧客の受け入れを行っており、2022・23年には各年125～150程の半日ツアーを開催している。

スケールデンマークの設立は、2004年に、ボー・クリスチャンセン（Bo Christiansen）氏と、ビービケ・ゴーパーセン（Vibeke Grupe Larsen）氏によってなされた。二人はデンマーク王立芸術アカデミー（Royal Danish Academy デンマークを代表する美術大学）に同時期に在籍し、共に建築を学んだ。現在はクリスチャンセン氏を筆頭に、筆者を含めた14名のフリーランスの建築ガイドによって構成されている。建築ガイドは、皆建築や都市計画、ランドスケープ分野の教育を受けた者で、大半は普段建築事務所に勤務したり、自身の建築事務所を経営したりしている。そして、クリスチャンセン氏からツアー開催の依頼を受けると、建築ガイドとして活動する。

筆者はクリスチャンセン氏に、蒔田智則氏（コペンハーゲンで約10年環境設備エンジニアとして勤務）の紹介で出会った。クリスチャンセン氏が日本に長年興味があり、ぜひ日本の顧客に対してツアーを開催したいということで、働かせてもらうこととなった。

建築ガイドとして関わる中で、印象的だったことが二つある。一つ目は、コンサルタントとしてツアーを行うこと。二つ目は、ストーリーの伝達に重きを置くことである。

一つ目について、コンサルティングを行うためには、十分な準備時間が必要となる。ツアー開催を確定した上で準備を行うため、ス



A 3サイズの図版を現地で示し、イメージを共有する（クリマ、コトナとティッゲン学生寮を訪問）

ケールデンマークでは最低でも開催日の一カ月前にはツアー代金の振込をもってツアーを確約する決まりがある（開催まで一カ月を切った申し込みは、基本的に断る。ツアー開催は一年前に決まることも多い）。このように、決まったルートを繰り返す定型的な観光ツアーではなく、十分な準備期間を持ってそれぞれの顧客の要望に応じたコンサルティングを行うという点が、建築ツアーの付加価値を高めているのだと学んだ。

二つ目について、クリスチャンセン氏は、「インターネットで調べられるような情報を羅列するのではなく、それらの情報を紡いでエリアごとのストーリー、そしてツアー全体を通したストーリーを伝えることが重要」と強調していた。そのため、ツアーを計画する際は、訪れる建物の軒数に重きを置いたものにならないよう注意する。また、十分なコミュニケーションを取れるよう、一グループあたりの最大人数を12人としている（12人以上の場合は別グループを設ける）。また、ツアーの理念は、「エデュテーメント（エデュケーション（教育）+エンターテインメント（娯楽）を併せた新語）」という言葉で表される。

ここで、運営についても紹介する。基本的にはメールでツアーの問い合わせがくると、クリスチャンセン氏が全て対応し、日程やツアー内容の詳細、そして当日担当する建築ガイドを決める（日本からの問い合わせには、筆者がクリスチャンセン氏と連絡を取りながら調整する）。コペンハーゲンの場合、ツアー内容は、エリアごとにわけられた10のコース（1エリアあたり4時間が基本）を元に、インテリアツアーを組み入れたり、エリアを少し広げたりとアレンジしていく。スケールデンマークでは、

第二の都市のオフィス、そしてヨーロッパいちサステナブルな島と賞されるボーンホルム島でも建築ツアーを開催しているが、代金は半日ツアー（4時間）、もしくは終日ツアー（8時間）で共通の設定となっている。

オールボー大学在籍中に実感したが、デンマークの大学では、新しく得た知識を粘土のように試行錯誤して変形させ新しいものを作り、その理由を説明して初めて評価される（計算式の丸暗記などは全く評価されない）。そして、この試行錯誤の経験が、社会においてもイノベーションの創出に大きく貢献しているのだと感じた。スケールデンマークでは、この知識の試行錯誤（編集）が対話を基本としたコンサルティングとして提供されているといえる。日本でも、参加者の抱える専門的な課題について共に考える場となるような建築ツアーが広まれば、数値の規制を超えて、より質の高い景観や住みやすい都市を形成するための一助になるのではないかと考えた。

スケールデンマーク

<https://www.scaledenmark.dk/ja>

ガイディングアーキテクト

<https://www.guiding-architects.net/>



JR 東日本建築設計と、鉄道駅舎を含めたインフラストラクチャのデザインを行う建築事務所（Gottlieb Paludan Architects）を訪問

## 対談『韓国研修で学べき景観』

芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科教授 作山 康、同教授 鈴木 俊治

景観文化編集委員：金子 祐介（城西国際大学観光学部助教）、オム・ジョン（EOD design代表）

コロナが明けて以降、景観デザインを学ぶ日本の大学が、ゼミ旅行や研修で韓国を訪れることが増えてきています。韓国が日本に比べ物価が安かったり、近い国であるということも起因していますが、学べき景観デザインが多いことが理由かもしれません。そこで、今回は、韓国での研修を通して、景観デザインについて学んだ日本人学生が、韓国から何を持ち帰ったのかということについて担当教員からお話を聞いてみようと思います。

## ○事前学習の難しさとしての言葉の壁

**金子**：今回、韓国で研修を受け持つこととなり、韓国の景観デザインを学ぶために日本語で読める書籍を探しましたが、そうした本が日本では流通していませんでした。そのこともあってか、特殊な建築を取り扱った雑誌や韓国の観光地を扱ったファッション雑誌、YouTuberの紹介するおすすめスポットなどを介して、学生たちは韓国の景観デザインの現状を学んでいました。

もちろん、韓国の景観デザインを扱ったweb siteには、多くの専門的な説明などが流通していると思いますが、翻訳の課題もあり、一般に流通した観光的なweb siteや雑誌、YouTubeから理解を深めるしかないといった状況のようです。

**ジョン**：日本も同じかもしれませんが、韓国には景観デザインに対する一般人向けの書籍は出版されていません。これは、景観デザインを一般の観光に活用しようという意識がないからかもしれません。例えば、建築に特化すれば、ソウル市が『SEOUL Architecture Guide』（<http://ebook.seoul.go.kr/Viewer/3P1KIP9OR0BN>）というMAPをwebに公開したり出版しています。ただ、こうしたものは、建築に限らず、どのジャンルでも個別に出版され、別々の視座のもとに評価されています。

**金子**：ソウル市内は、看板のフォントをハングル表記にしないといけない特区を作るなど景観特有の面白い取り組みが多いと思うのですが、あまり知られていないですよ。仁寺洞には、世界初の母国語表示のスターバックスの看板もありますが…。

**ジョン**：韓国国内でも、先に述べたように、景観デザインをまとめて扱う専門誌や雑誌などはないので、海外に書籍として流通させることは難しいと思います。文化背景の違いなどもありますし、翻訳のハードルは非常に大きな課題だと思っています。韓国の景観の特徴や取り組みを知っていれば、英語や日本語で検索できるのでしょうけど、先に述べた通り、そこまで知られていない

ことも多いので、ハングルで検索しないといけないのが現状でしょうからね。

ただ一方で、来韓した日本の大学の教授陣を案内した際のことを思い返すと、景観デザインの中でも公園だけ、植栽だけといった具合に、何かに特化して見ていかれる方がほとんどでした。

**金子**：確かにそうですね。ただ、そこをトータルに見ていかないと景観デザインというものを考える癖ができていかないのではないのかとも思います。

## ○日本の景観デザイン教育の現状

**作山**：今回、芝浦工業大学の2研究室が、なぜか同日にソウル市内を視察する研修を行うこととなりました。

私の研究室の今回の研修の目的は、ソウル市内の建築・都市プロジェクトの現状を知ることと、ゼミで行っている屋台（埼玉県上尾市原市団地のコミュニティカフェ）と比較すべく他国の屋台のデザイン手法を学ぶことを目的としました。

その他にも、知らない土地で、海外の建築・都市・土木などを横断してトータルに



南大門市場の屋台

## TDA トピックス

## 神楽坂 Jane's Walks2023 に参加しておもう



雨にも関わらず老若男女の参加者をお迎えした



神楽坂地域がまさに斜面地にあることを示す「あかぎ児童遊園」の滑り台

Jane's Walksは世界中の都市で行われているイベントである。その仔細は拙紙57号（2022/9月号）にある鈴木俊治氏（TDA正会員・同会理事／芝浦工大教授）の解説におゆずりする。

2023年5月7日（日）のJane's Walks神楽坂には、TDAは神楽坂のNPO法人粋なまちづくり倶楽部と共催する形で参加し、私はランドスケープの専門家として、アテンドをする立場で参加させてもらった。

私が参加した【新旧・職住の混在】というテーマは神楽坂地域ほぼ全域をあるくコースでしたが、それ以外にも、以下のような町歩き方を様々な視点で楽しむイベントであった。あいにくの雨にも関わらずそれぞれのグループには5,6人以上の市民が参加してくれた。

- 【神楽坂とフランス】
- 【神楽坂と夏目漱石】
- 【江戸時代から残る古い道で、神楽坂を歩いてみよう】
- 【神楽坂の色を測る】

毎年テーマを少し変え、町を掘り下げていくことで、町の良さを多くの人に知ってもらういい機会になっているとおもう。



学ぶ手法を身につけてもらいたいと感じていました。

最近の学生は、先のお二人の話ではありませんが、ザハ・ハディドの東大門デザインプラザなど有名な建築以外のことを知ろうとしない現状があります。なので、私のゼミでは、身近なプロジェクトと紐付けながら学ぶということをしようということで、このような研修プログラムとしました。

**鈴木**：私たちは、韓国の建築家の方にソウルの建築や都市の案内をしていただきました。東大門デザインプラザでは建築ツアーに参加するなど、とても勉強になりました。こうしたサポートがなければ、「今、韓国で見るべきもの」に出会う機会には恵まれなかったかもしれません。

**金子**：こうした地域固有の最新情報を紹介してくれるパートナーを海外に持つということは重要なかもしれませんね。同時に、日本で研修を受け入れる場合、その海外からの来訪客に対し景観デザインについて説明や「サポートできる人材」を育成することも必要なことだと感じたと思いました。

### ○ソウルと日本の景観デザインの現状比較

**作山**：ちなみに、私も20年前くらいにJUDI都市環境デザイン会議の旅行で曽根幸一先生に連れて行ってもらって、石の職人さんの仕上げについて説明してもらったことを思い出しました。ただ、当時は、ソウルの石張りの橋梁などは、修復・保存がうまくできていませんでした。しかし、今回、久しぶりに視察をして、とても上手に



豪雨の後、清溪川に流れ込む濁流



高架道路を撤去した清溪川で休息

なったなという印象を受けました。とくに、清溪川の景観は、この十年で劇的に変わっていました。1970年代から変化が起こった横浜市の都市デザインの変化を思わせてくれました。

**鈴木**：今回、光化門広場改修などのビックプロジェクトを見て、韓国では行政や企業が景観づくりに先導的、積極的に取り組んでいることが大きな成果を挙げていると思いました。歩行者優先道路のストリートファニチャーや市民に開放されたパブリックスペースも素晴らしい。こうした景観づくりでは、日本は後れを取っていることを実感しました。日本にも、部分的にはよい都市空間もできていますが、特区の範囲内

のみで計画されており、総じて、ダイナミックさに欠けています。一方景観デザイン支援機構を介し、韓国で景観デザインに関わる関係者のお話を聞いた際に、市民参加型の景観づくりについては日本の例が参考にされていることがわかりました。

### ○景観の保存地区と観光的価値

**作山**：先の清溪川の変化の話ではありませんが、現代の出来上がってしまった景観の状況だけを見せても、今の日本の学生にはその価値は何も伝わらないので、歴史的な話を交えながら、何がこの十年で変わっていったのか、これからの日本はどうあるべきなのかということを共有しました。



工場地帯のトレンドスポット聖水のカフェ・ギャラリー



伝統家屋を活用した人気のカフェ

ランドスケープアーキテクト／TDA正会員 井上 洋司



路地も地形変化の激しいところでは有効な歩行空間 (神楽坂 Jane's Walks2022)



専門家と色彩の測定で思わぬ発見することもあるかもしれない (神楽坂 Jane's Walks2022)

参加して一番感じたことは、同じ町を見ていても、100人いれば100通りの街が、街の見方があるということだ。つまり、参加者がそれぞれの視点で街をみて、それぞれの感性で街を感じることは、街の多様な姿を発見することになる。Jane's Walksに限らず、色々なグループの「まちあるき」はそれだけでも多様な街の姿を見出す事につながると考えさせられた。其の上でさらに様々な専門家がアテンドすると其の分析も深くなり、今まで気がつかなかった新鮮な驚き、新たなまちの発見につながるかもしれないということだ。

嘗て、同じような経験を松本市の街路樹を見ながらの「まち歩き」をした時にも感じた。見た目の景観的なあり方やその剪定管理の視点などから言及する私と、一緒にあるいた樹木医さんは同じ樹種の生育状況の違う状態を見て、その生育の優劣を病理的に解説してくれる。

人が違えば、「まち」も違うということは考えてみれば、「まち」そのものが生き物であることの証左なのかもしれない。この「景観文化」を読まれている多くの方にぜひ神楽坂や、松本で行われているような複眼的な町歩きイベントを多様な視点からの活動をお勧めしたい。

ひょっとすると、普段全く気がつかなかった視点からの新たな「わが町」が発見できるかもしれないからだ。

とくに、景観が変わることで結果的に観光客が増えているという実情を見せることで、景観づくりが及ぼす効果について考えてもらいました。観光に紐づく景観の意義について語る言葉は、今の学生には分かりやすいこともあり、とてもよく響きます。

**鈴木**：観光視点で考えると、ソウルの北村の韓屋集落や西村周辺での歴史的建築を活かした再整備は成功した事例ではないでしょうか。とくに、韓屋のリノベーションは、地震がないこともあり開口部が大きく取れるので、日本の町並みとは異なったファサードを作り出していました。その光景を日本の学生たちは新鮮に感じていましたね。例えば西村では地域内に駐車場を作らず、公的補助を用いて地域の外れに駐車場をまとめて整備し、歴史的環境を守りながら歩きやすいまちづくりを進めています。

こうした地域資源を群として残すため、自動車を入れない地区計画を策定しているという話を現地で伺いました。例えば、西村では、地域内に駐車場を作らず、地域のはずれに駐車場をまとめて作り、地域内を歩かせる仕組みづくりを行なっているそうです。

また、面的な保存だけではなく、個別のリノベーションカフェ（onion安国店、onion聖水店など）などもとてもよくできしており、学生たちにも評判が良かったです。

こうしたリノベーション建築の詳細については、先述の韓国建築家の紹介がなければ、私たちは見過ごしたかもしれません。韓国の巨匠建築家である金壽根氏の事務所だったものを改修したアラリオミュージアム・イン・スペースもそのひとつです。

#### ○学生の視点から学ぶこと

**金子**：私は、在職している城西国際大学観光学部において、まちづくりに関わりたい学生に対し、観光地における景観づくりの必要性を共有しています。ただ、観光学部の学生の大半は、建築系や都市計画系、デザイン系の学生と異なり、物そのものの

質に対する興味はそこまでありません。

しかし、「観光に寄与する景観とは何か？」ということをデザイナーの有名性などからは判断しないので、視点としては面白いなと考えています。例えば、彼らは、ロゴオブジェを景観を構成する要素だと考えています。建築や都市計画、デザインを専門とする学生は、ロゴオブジェを景観を構成する要素とは思わないかもしれないのですが、その背景にある景観を写真の中のように切り取り、切り取られた景観がInstagramに掲載され世界に流通していくことを考えると、これも現代的な景観を考える上での重要な取り組みの一つだと思います。

BTSを全面に押し出し国を挙げて行なっている観光推進プロジェクトも同じようなものなのですが、あるスポットづくりを行うことですでにある景観を可視化させる仕掛け作りをしているのかなという印象を受けました。これは学生のふとした言葉から学んだことです。

**作山**：確かに、建築系や都市計画系、デザイン系の学生は、そういう装飾的なもの・演出的なものは景観を構成する要素だとは考えていません。

ただ、私は、ロゴオブジェのようなものは、市民交流の一つのツールとしては、大きく役立っていると思います。そもそも、景観や都市空間は、そうした人的交流の背景でいいとも考えますので、それはそれで価値があることだと思います。

#### ○世界を意識した建築群と日常生活を意識した景観

**金子**：一方で、ソウル市内では、官民間問わず世界のスター建築家を登用して建築のビックプロジェクトを行っています。先ほどお話にあがった東大門デザインプラザだけでなく、ソウル大学美術館はOMAだったり、梨花女子大学のキャンパスはドミニク・ペローだったりと要所となる施設は、海外の建築家が設計をしていますね。こうした建築群は、特異な形態をしていることもあり、地域のランドマークになっています。そのため、日本でも情報は手に入りやすく、学生たちにとっては事前学習がしやすい研修先だと思いましたが、同時に、なぜこんなに海外の建築を途用しているのかは不思議に思いました。

**ジョン**：韓国のプロジェクトは、15年くらい前から、日本円にして1億円以上の建

築や都市計画を行う場合、国際コンペにするというルールがあります。そのため、海外からの優秀な作品が多く集まるわけです。ソウル市内に至っては、すべての公共施設は、小さな町の公民館ですら国際コンペになっています。

ただ、先ほど紹介されたような大きなプロジェクトにおいて海外の建築家たちが施設の設計コンペを勝ちとっていく理由は、韓国で建築家育成をうまくできていないからだと思います。そのため、韓国の若い建築家がコンペを勝ち取っていく土壌は醸成されていません。

ちなみに、研修などで来韓した方を案内する側としては、先に話に上がったようなシンボリックな場所を案内してしまいがちなんですが、日本から来韓される方々は、実際はそうしたところが見たいわけではなく「韓国の日常生活に根ざした景観が見たい」と口を揃えているんですね。景観を観光に活用していく際の一つの課題かもしれません。

**作山**：私たちの学生も、韓国のマンションで形成された日常の景観を見ながら、「寒い地域なので、内側の部屋の方が、不動産的な価値がある」というようなことを伝え、とても興味を持って話を聞いていました。

ちなみに、先に話してくれたようなソウル市の景観計画のルールは、マンションにも同じように適用されるのでしょうか？

**ジョン**：ソウル市は30階くらいのマンション群で景観が作られています。その個々の建物の高さや色、公開空地の面積などのルールだけは、ソウル市が作った景観計画ですが、そのほかのデザインは、ヒュンダイやサムソン、ロッテなどの企業に属した建設会社がそれぞれのブランディングに則ったデザインルールを作っています。

**金子**：そうした他国の景観デザインに対する背景を知った上で現地に赴くとまた違った景色が見えてくると思います。本日はありがとうございました。



金山・甘川文化村の戦略的フォトスポット



アラリオミュージアム見学



近年、世界の大都市が必死になって進めているのが、高木の樹冠で道路や建物に直射日光が当たらないようにすることである。その理由は、直射日光が当たった路面の表面温度は5、60℃になるが、高木の樹冠で遮られれば表面温度は20℃も下がり、コンクリートの蓄熱が減らせることと、木陰は人も車も涼しいことである。都市の一定面積に占める高木の樹冠で覆われた面積の割合（樹冠被覆率）が30%まで増やせば、暑さに起因する死者数を約40%減らすことができるという医学雑誌の論文があるように、樹冠被覆率増大は都市の死活問題になっている。例えば、オーストラリアのメルボルンでは2012年時点で20%程度の市街地の樹冠被覆率を2040年までに40%にしようとしている。

都市景観は一般的に街路から水平方向を眺める視点で云々されることが多いため、高木による樹冠被覆は「街路の天蓋」とも云える新たな視点で、街路の雰囲気も大きく変わる。ただ、都市の樹冠被覆は暑くて街中を歩くことも住むこともできなくなる温暖化・ヒートアイランドへの差し迫った対応であり、景観以前とも云える問題である。

建物の形状が様々な日本の都市では、街路樹が都市景観を大きく左右するが、その役割は視覚に止まらない。街路樹がないと、殆どの歩行者は車道から遠い沿道寄りを歩く。当然、向こうから歩いてくる歩行者も沿道側を歩くから、ぶつからないようにどちらかが譲ることになる。それに対して、街路樹があると、歩行者の1、2割が車道寄りも歩くようになる。つまり、街路樹が車道と歩道を仕切ることで安心して歩けるようになり、自由に歩行位置を選べるようになるのである。



写真1 強剪定されたプラタナス 東京霞ヶ関財務省前



写真2 仙台市のケヤキ街路樹

ドライバーの目の動きにも街路樹は大きく影響する。街路樹がないと、ドライバーの視線は否が応でも沿道の建物や看板に引きつけられ、それら誘因対象と前方とを視線は高速で往き来する。ところが、街路樹で沿道の建物や看板が遮蔽されると、ドライバーは前方をゆったりと見るようになる。

街路樹の樹冠が小さく剪定されて沿道の建物等がみえる街路と樹冠が大きく建物等が遮蔽された街路では、自律神経系の心拍にも違いが表れ、後者では副交感神経系優位になることも報告されている。つまり、街路樹の効果は視覚に限らず人の行動や自律神経系にまで及んでいる。

世界の多くの都市の街路樹が大きく樹冠を広げているのに対して、日本の殆どの街路樹は小さくコンパクトに抑制されている。加えて、近年では管理費削減を理由に3年前後伸びた枝を一遍に切り落とす「ぶつ切り剪定」が全国的に見られ、世界的に稀な都市景観となっている（写真1）。ただ、数年に1回の剪定でも仙台市のケヤキやイチョウ、トウカエデのように大きく爽やかな樹冠が保たれている街路樹もあるのであり（写真2）、ぶつ切り剪定は管理費削減よりも街路樹管理者の委託の仕方や剪定後の評価が適切に為されていないことに依るところが大きい。

ぶつ切り剪定で樹高を低くし、枝張りを小さく抑制すれば、当然、不足する葉を捕おうと幹や太枝から沢山の小枝（胴吹き）

が出るし、それでも足りないときは幹の根元から葉も出る。そうした鬱蒼とした街路樹を「自然な樹形」と思っている人が意外に多いが、木は樹冠内部にも光が入るように幹や枝が成長するのが自然であって、鬱蒼とした街路樹は不適切な管理の結果である。仙台市の大きく爽やかな樹冠は木々の自然な伸び方に逆らわないようにしながら、車道側・歩道側の建築限界や越境、信号機への視距などを確保するように剪定されている表れでもある。仙台市以外で樹冠を大きく広げた街路樹が全国的に見られるのがソメイヨシノで、「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」が功を奏している。

急速な温暖化に対応するためには日本で



写真3 昭和初年のユリノキ街路樹の剪定（東京都公園協会所蔵）  
（次頁へ続く）

も樹冠拡大を急がなければならないが、片側1車線で歩道が狭く街路樹上部に電線もある道路では、樹冠は小さく抑制せざるを得ないことが多い。そうした街路樹で行われるのが透かし剪定という技術である。樹高や枝張りを抑制しながらも、葉はもちろん胴吹きも出ない剪定で、正に日本の樹芸技術であり、亭々と枝を伸ばした街路樹の爽やかさとは異なった親しみのある景観になる(写真3)。

## 引用文献

Tamara, lungman et.al.: Cooling cities through urban green infrastructure: a health impact assessment of European cities、The Lancet vol.401、577-589、2023  
藤井英二郎・海老澤清也・富内匡・水眞洋子：街路樹は問いかける、岩波書店、2021  
坂巻宏紀・花沢弘次・藤井英二郎：路傍植栽と歩行の関係―千葉海浜ニュータウン内

の一般道路に付帯した歩道の場合、千葉大園学報44、191-199、1991  
藤井英二郎：都市景観と植物、『都市景観におけるデザインと材料』（工業技術会編）、研修社、155-163、1995  
細野哲央・粕谷修之・藤井英二郎：夏季における剪定方法の異なるケヤキ街路樹の生理・心理的機能、人間・植物関係学会雑誌16(1)、1-6、2016

# 身近な景観をつくる

サインデザイン専門誌「signs」編集長 武山 良三

## 第9回 京都の暖簾：景観づくりを支える住民意識

京都市は2007年9月、100年後の将来を見据えた「新景観政策」を策定する中で、市内全域で屋上の広告物や点滅式・回転式の広告物を禁じた屋外広告物条例を施行した。市内の代表的な繁華街である四条河原町界隈では、多数の広告物が撤去され、全国展開するフランチャイズチェーン（以下FC）店の赤い地色の看板が茶色や白色に変更された。新条例の施行に当たっては7年間の経過措置期間が設けられたが、2012年からは強化期間として、前代未聞と評される100名超の職員体制をつくり、広告物をひとつひとつ確認・是正していく「ローラー作戦」を展開した。その結果、2018年3月には96%が適合するようになった。京都市では、規準に適合していない広告物を是正する一方で、京都らしい景観形成に資する優れた広告物を表彰する制度や、暖簾や提灯など京都にふさわしい広告物の設置・設計等にかかる費用の一部を補助する制度などを設けた。

不適切な広告物を減らし、魅力的なものを増やす。京都市の取り組みは両者に対応しているところが秀逸である。前者はローラー作戦に見られるように「公」の取り組みで達成できるが、後者は「民」の頑張

りが不可欠である。今日、小売業の主体はFC店となっており、それらがつくる画一的な景観が全国的に課題視されている。だからこそ地域らしい景観をつくっていくためには、昔ながらの店構えに独自の暖簾や看板を掛けた店が存在していることが重要だ。京都市の場合は、行政による支援策もあるが、実際に老舗の魅力的なサインがあるからこそ全国展開するホテルチェーンや世界的なブランドストアでも暖簾を掛けてみようという気になるのではと考えられる。

京都府では100年以上続く事業者を「京の老舗」として表彰しているが、1963年の制度化以来2005件もの事業者が表彰を受けているという。厳しい経営環境の中でもその存続を支えているのが地域住民だ。多少不便で割高になろうとも、地元に貢献している店で買い物をし、店と客とが地域を思う気持ちを共有しているからこそ維持できているのではないだろうか。更に言えば、厳しすぎるのではと批判されることもあったローラー作戦も、地域にふさわしい景観をつくりたいと願う住民の支持があればこそできた施策だ。

住民による身近な景観づくりといえば、清掃や花壇づくりなどの活動が想起されるが、地元の店で買い物をし、店の存続に貢献することが景観づくりの一端を担う。魅力的な暖簾を見かけたら、その背景に地域

の住民が深く関与していることを思い浮かべて貰いたい。

（「京都の暖簾シリーズ」最終回）



1915年烏丸で創業した「片山文三郎商店」は、呉服に用いられた絞りの技術を活かしたモダンな商品で注目されている。橋弁慶町の本店には独特な絞りの暖簾が掛かっている。



ドイツのゾーリングゲンで1731年に創業した刃物メーカー「ツヅィリング京都店」は、姉小路の町並みに調和した暖簾を掛ける。

## ホワイトボード

本号では、『景観と観光』と題し、今後も回復していくであろうインバウンド向けの観光コンテンツとして「景観」が寄与するのかということを考えてみた。また、日本では景観を活用する観光事例がどのように取り組まれているのかについて専門家から聞き

取りを行う貴重な機会となった。しかし、その取り組みを支える人材が少ないことも、今回の企画を通して理解できた。建築家やデザイナーなどの専門家は多いが、その専門家の言葉が一般に届くように翻訳できる人材育成が今後は求められる。(金子)